《授業と子ども》

ひらがなの授業（4）

―　五十音図のひみつ　―

千葉　建夫

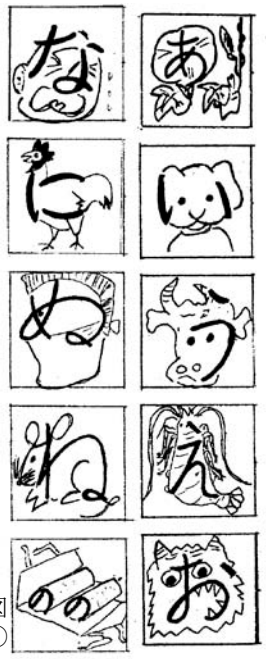
「あいうえお」は　にほんごのおかあさん

子どもたちが「ア」という音と結びつけて「あ」の文字を学ぶまでの指導を整理すると、次のような手順をふんでいる。

①単語クイズをしながら、「ア」のつく単語をとりだす。②単語の音節の数を数え、いくつかの単語から共通の「ア」の音節の場所を確かめる。③「ア」の音節の口形と発音について確認する。④「ア」の音節に「あ」というひらがな文字があてはめることを説明する。⑤「あ」の字形の筆順と書写の練習。この後に「あ」のつく「ことばさがし」の練習をいれる。

「い」「う」「え」「お」についても基本的には同じ手順をふんで一字ずつ学習していった。授業が同じパターンにならないよう、①の指導の導入部分は、クイズだけでなく、絵本や紙しばい、ペープサートやからくり人形、実物などを使い、その時間に必要な単語を取り出す工夫をしてみた。

入学前の小さい子は、カルタで遊びながら、かな文字を自然と覚える。これは一枚一枚のカルタの絵が一つの文字を想起させる役目を果たしていると思われる。それで、「ア」は、あひるの「ア」とか、あさがおの「ア」というようにすると、覚えやすいように思って、「ア」のつく「ことばさがし」の後、そのうちの一つを選び、文字絵を作って、教室に掲示しておいた。（図①）



図①

日本語の基本となる母音、「あ」「い」「う」「え」「お」の個別の学習がすんだ段階で、もう一度、口形図（図②）を使って発音のしかたを確かめ、音と文字のそれぞれの関係を整理した。そしてこれらを「あ行」という日本語の「おかあさんのことば」のグループとしてまとめておいた。

文字を書く練習は、「あ」を覚えたら、その一字だけを入れて、「あ

図②

たま」「あさひ」「あやめ」などは「あ・・」とし、「あめんぼ」「あざらし」「あすぱら」などは「あ・・・」のようにノートに書いていった。次の時間にまた一字を学ぶと書き表せる文字が増えていく。学習が進むにつれて「・」で表す文字が少なくなっていった。

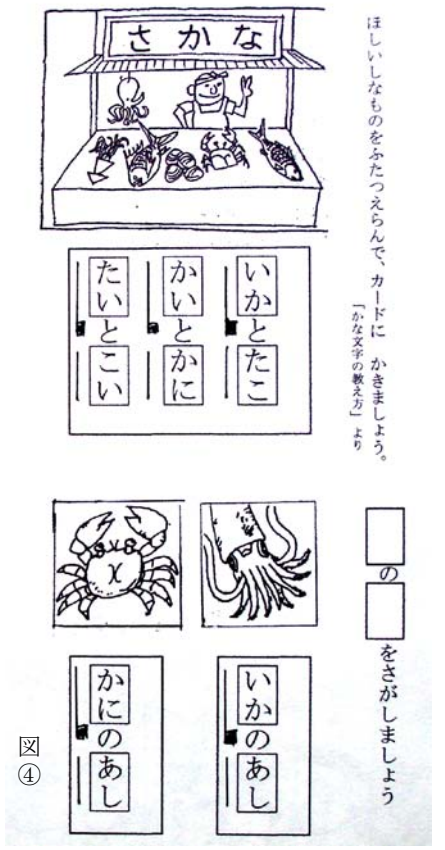
カ行の以降の学習についても、一字一字の指導が原則だけれど、子どもたちの力に応じて指導のテンポをはやめることもできる。カ行の「かきくけこ」の五文字は、例えば、「かき」「きく」「こけ」などの絵を出して二つの音を一緒に学習もできる。カ行が終わるとア行とカ行を組み合わせて「ことばさがし」をしていたら、子どもが「かき　くう　けいこさん」などのようなことば遊びを考え出してきた。これをノートに書き写すとカ行の文字練習になった。（図③）

図③

ア行、カ行、サ行と行の学習が終わると既習の文字で書き表せる単語の量は急に増えてくる。どんな単語がつくれるかを子どもと一緒に考えて、その単語の絵カードをつくり、その絵を見ながら発音し、文字に直す練習をした。

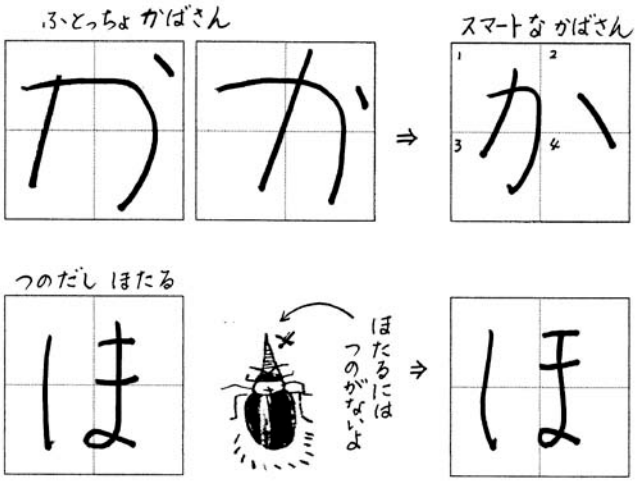
サ行、ハ行、ラ行を学習していたら、「しんぶん」を「ちんぶん」、「しま」を「ひま」「おすし」を「おししし」、「だいこん」を「らいこん」のように文字を書きまちがう子が出てきた。確かめると発音がまちがっていた。「す」と「し」のように二つの音を発音する口形や舌の位置が非常に近いとよく起きるようだ。そのときは手鏡を用意し、口形や舌の動きに注意しながら、二つの音の発音練習をし、文字と結びつける練習を繰り返した。

タ行やナ行を学ぶと、並列の助詞「と」や主客の助詞「の」が使えるようになる。ここでは、「かいものごっこ」や「もちぬしさがし」（図④）などをして遊んだ。「と」や「の」が「ものの名前」に使われるだけでなく、「くっつき」の役目もしていることに気づかせたいと思った。



図④

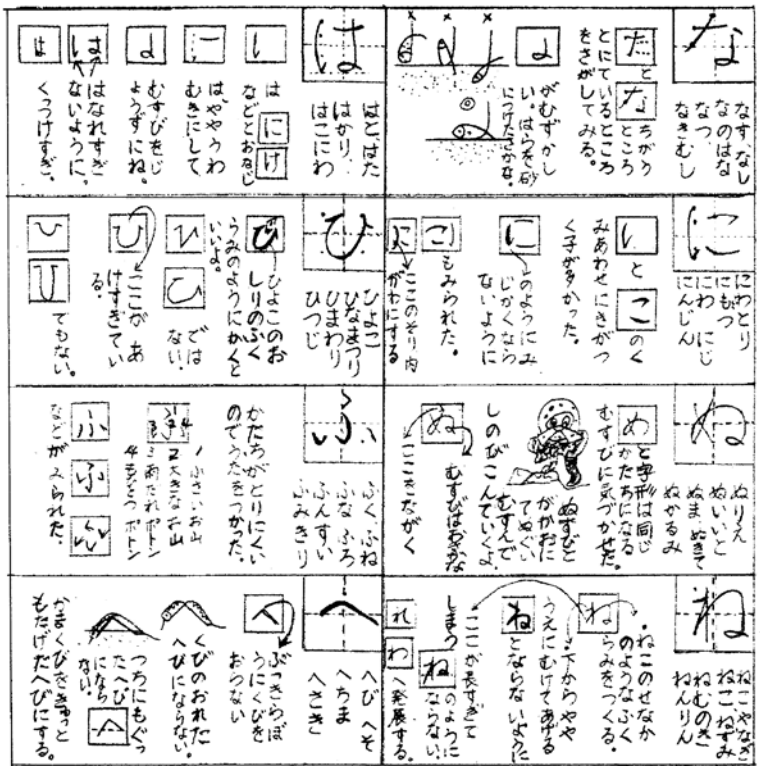
学習が進んで、提出文字がしだいに増えるしたがって、子どもたちの書く文字に混乱が見られるときがあった。字形の整わない文字のときは、例えば、「か」の練習では「ふとっちょかばさんでなく、スマートなかばさんに書くといいよ」と声をかけた。「ほ」の字の後に、「ま」の字を学習すると、下図のように角がでてしまうのが意外と多い。このときは、「ホ―ホー　ほたる。こい。ほたるに、つのがない」と歌いながら印象づけた。（図⑤）



図⑤

子どもたちのまちがいは偶然ではなく、法則性があって、学んだこと自分なりに応用することによって起きるようだ。だから、似ている文字が出てきたら、前に出てきた文字と比較し、相違点を確かめて、違いの部分を印象づけるようにしてみると効果的だ。子どものまちがいやすいところを見つけて文字の指導メモをつくっておくのもいい。（図⑥）

図⑥　私のひらがな指導メモノート(いくつかの例)

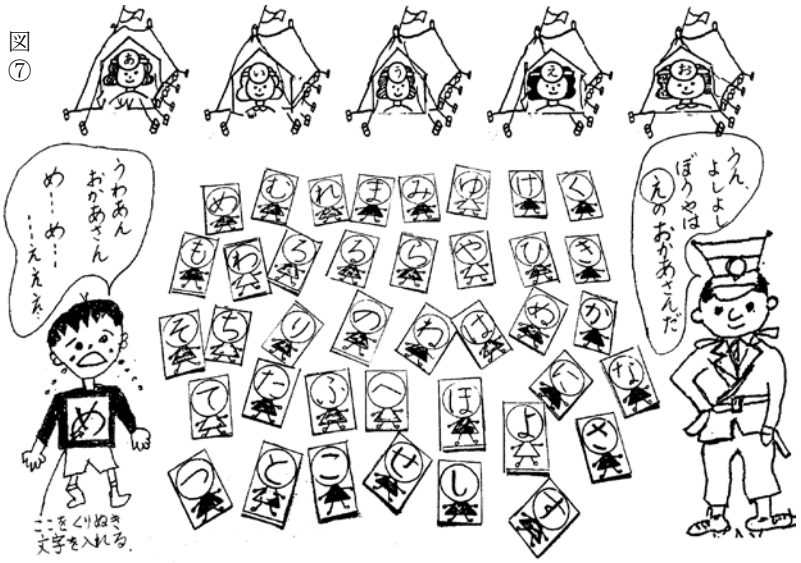


まいごの音の　おかあさんは　だれ？

これまで個別に学習してきた四四文字を五十音図にまとめる学習に入った。最初のまとめでは「ん」と「を」五十音図からはずして別にあつかい、その後に欄外においた。「あ」「い」「う」「え」「お」の五つの母音のテントを用

意し、母音をのぞいた三九音の文字カードをばらばらにして教室の床に並べた。　最初は「まいごさがし」の授業から始めた。（図⑦）

「あ、い、う、え、おの家族が自然公園にキャンプにいきました。子どもたちが遊びに夢中になってまいごになってしまいました。自分のテントがわからなくなって、泣いています。だれかおまわりさんになって　この子をおかあさんのテントにつれていってください」



図⑦

「ぼく、おまわりさんになりたい。ハイ、ハイ」

「最初、ケンちゃんがおまわりさんね。どうするの？」

［テントはどこってきいてあげるの］

「いつまでも泣いているよ。こまったね。おや、この子は泣きながらおかあさんをよんでいるよ。胸のところになんて書いてある？」

「め」ってかいてある」

「め」ちゃんはね。『めー　めー』と『め』を長くのばして泣いているよ。おや、おかあさんの名前が聞こえてくるよ。おかあさんはだれかな？」

子どもたちはいっせいに「めーめーめー」と声を出した。

「めーめー」「めーエ、めーエー」教室がなんだか、山羊小屋のようだ。そのうちにケンちゃんが元気よく叫んだ。

「あっわかった。エだ。えのおかあさんだ。」

「そうです。けんちゃんおまわりさん、ありがとう。」

泣いている男の子の胸からめの文字をはずしてえのおかあさんのテントにいれてあげた。次にちのカードをまいごの子の胸に下げた。

「さあ、こんどは、この子はどこの子だろうね。」

「ちだから、ちーちー。」「ちーイー、ちーイー。」

「わかった。いのおかあさんだ。」

まいごの子どもの一文字の音が「子音＋母音」で作られているという日本語のしくみが分かってくると、子どもたちは、がぜんはりきった。みんな、おまわりさんになりたがった。かわるがわる、おまわりさんになって、まいごの子どもたちみんなを「にほんごのおかあさん（母音）」のテントにつれていくことができた。こうして、子どもたちは

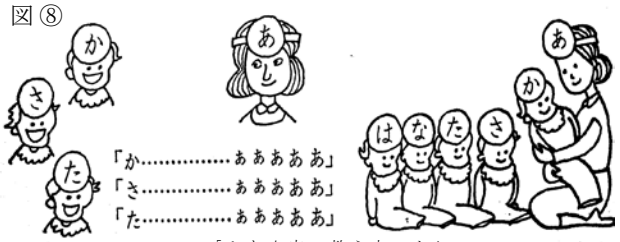
ひらがな５０音図の段の構成をすっかりのみこんでいった。（図⑧）

あいうえおマンション　五十音図のひみつ

無事にテントに戻って楽しく遊んだ子どもたちは「あいうえおマンション」に帰った。

「五階のマンションの右側の部屋はあ、い、う、え、おというおかあさんの部屋です。あのおかあさんのうちには９人の子どもがいます。子どもたちが大きくなったので、一人ずつお部屋をもらってすんでいます。いのおかあさんのおうちの子どもは７人です。つぎのうのおかあさんのうちの子どもは８人です。えの子どもは７人、おの子どもは８人・・・」（図⑧）というように、エ段もオ段も同じように話をして五十音マンション図（五十音図表）を完成させた。（図⑨）

図⑧



「かな文字の教え方」より

この図をながめていたサトコちゃんが「せんせい、『かきくけこ』は、なんでみんな三角の赤い服をきているの」と聞いてきた。図の子どもの絵には「さしすせそ」はみんな緑、「たちつてと」は黄色というように同じ行の子どもには同じ色の服をぬっておいた。

「おうちもちがうし、おかあさんもちがうのに、どうして同じ色の服をきているのかな。」と子どもたちはふしぎがっている。

「服にはひみつがあるようだよ。」といって最初はわかりやすい青い服の「ま」行をとりあげた。

「子どもたちの名前を、ゆっくりよんでみるとわかるよ。」とヒントを出した。子どもたちにペアになってもらい、口元をみつめさせ、交互に「ま」「み」「む」「め」「も」と、言い合いっこをした。しばらくすると、コウジくんが「せんせい、上のくちびると下のくちびるをくっつけて、ぱっとはなすと『ま、み、む、め、

図⑨

も』になるよ」と言い出した。もう一度みんなで確かめると、確かにくちびるを閉じて、次に母音のアイウエオを発音すると、「まみむめも」が生まれる。「それで青い服をきせたんだ」と子どもたちは納得した。それから、「まみむめも」の仲間をマ行と呼ぶことを教えたら、子どもたちは「ぱっとくちびるひらく　マ行」と名づけた。音が作られる特徴を他に探すと、「たちつてと」は上の歯ぐきに舌先をつけてきゅうに離すとできる音だとわかった。続いて、舌をつかって出す音を調べたら、「なにぬねの」は、舌先を使って鼻にひびかせる音、「らりるれろ」は、舌さきではじく音などが見つかった。他の行にもそれぞれ共通の発音のしかたがあった。五十音マンションの図では音のできかたの違いを子どもの服の色で表しておいたのだが、このようにして、「子音＋母音」の音で、最初が同じ子音で始まる音のグループが、それぞれの行ごとに集まっていることが分かった。四年生で学習することになっているローマ字の訓令式で、このひらがな五十音図を表記してみると、この段と行の構成原理がみごとにわかるようになっている。（図⑩）

wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
i	ri	i	mi	hi	ni	ti	si	ki	i
u	ru	yu	mu	hu	nu	tu	su	ku	u
e	re	e	me	he	ne	te	se	ke	e
o	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o

図⑩

子どもたちがいろいろなことを考えるようになると、「どうして『やいゆえよ』や『わいうえお』のい段やえ段にはおかあさんがいないの？」と聞いてくる子がいる。気のきいた子が「子どものいないお部屋はからっぽだとさびしいから、おかあさんがいつもいってあげているんだね。」と説明してくれたこともあった。もし、疑問が出てきたら、「やいゆえよ」は「あいうえお」とよく似ていて、イの口の形でアというと「や」になり、イの口の形でウをいうと「ゆ」になり、イの口の構えでオをいうと「よ」になることや、また、イの口の構えでイをいっても「い」にしかならないことをみんなで確かめてみてもいいだろう。また、ワ行は、むかしは「わ（wa）、ゐ（wi）う(u)、ゑ(we)、を(wo)」という音と文字があったのに、今は「わ（wa）」だけがのこっていて、他の音は母音の「いうえお」と同じ発音するようになったことや「を(wo)」も「オ（o）」と発音するようになり、ものの名前のたんご(名詞)ではなく、くっつき（助詞）にだけ使われるようになったことなども説明してもよいかもしれない。

このように、五十音図にまとめてみると、このひらがなの図が漠然と並んでいるのではなく、段と行がそれぞれ見事なしくみをもってならんでいることが分かってくる。

一年生の子どもたちにこのしくみを見つける授業を組むと非常に興味をもって取り組み、五十音図を身近なものとして感じてくれた。五十音図のひみつを学んだあとは、それぞれの段と行をリズム歌のように暗誦して、いつでも言えるようにしておくと、これからの学習に生きてくる。